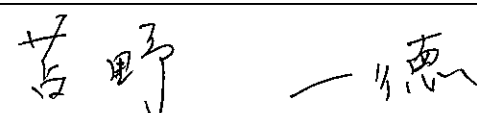
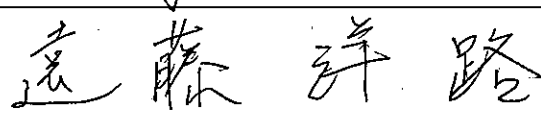


# 教育委員会会議録

令和3年(2021年)4月定例教育委員会会議

開 会 日	令和3年(2021年)4月22日(木)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 4時00分	
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室	
出 席 者	委員 会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員
	事務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他
提 出 議 案	<p>議第30号 熊本市教育委員会に係る行政手続き等における情報通信の技術の利用に関する規則の一部改正について</p> <p>議第31号 市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会委員の委嘱について</p> <p>議第32号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱及び任命について</p> <p>議第33号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について</p> <p>議第34号 熊本市指定有形民俗文化財の指定について</p> <p>議第35号 熊本市附属機関設置条例の一部を改正する条例案に対する意見について</p>	
報 告	<p>(1) 令和3年第1回定例市議会報告について</p> <p>(2) 熊本市学力調査の結果について</p> <p>(3) 熊本市立学校教員採用選考試験の実施について</p> <p>(4) 令和3年度(2021年度)熊本博物館年間スケジュールについて</p>	
署 名		
		
会議録作成者	教育政策課 木村三恵	

〔開会の宣告〕

遠藤洋路 教育長

令和3年4月定例教育委員会会議を開会いたします。

〔会議の成立〕

遠藤洋路 教育長

本日は、私の他4人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。

会議録署名人は、苫野委員と私とします。

〔公開の審議〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、本日の議事のうち、議第32号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱及び任命については、委員の氏名を公開することにより、率直な意見の交換又は意思決定の中立性が不当に損なわれるおそれがあること、議第35号 熊本市附属機関設置条例の一部を改正する条例案に対する意見については、「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」に該当すること、報告（3） 熊本市立学校教員採用選考試験の実施については、正式公表前の案件であることから、会議規則第13条第2号及び第4号の非公開事由に該当し、非公開の審議が適当と思いますがいかがでしょうか。

議第32号、議第35号及び報告（3）につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。

（全員挙手）

遠藤洋路 教育長

全員賛成により、議第32号、議第35号及び報告（3）は非公開とします。

日程第1 前回会議録等承認

遠藤洋路 教育長

3月25日開催の令和3年3月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録等を承認することに、ご異議はありませんか。

（異議なしの声）

異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

(1) 事業・行事等報告について

- 前回定例会議(R3.3.25)以降の事業・行事報告
- 今後の予定

日程第3 議事

・議第30号 熊本市教育委員会に係る行政手続き等における情報通信の技術の利用に関する規則の一部改正について

《中元 正人 教育政策課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第31号 市立幼稚園における特別支援教育等に関する検討委員会委員の委嘱について

《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

この検討委員会の検討課題というのは何でございますか。

松永直樹 学校改革推進  
課長

主な目的といたしましては、市立幼稚園に求められます役割の明確化と申しますか、その一番大きな目的は特別支援教育に関する部分でございますが、それに加えて、市立幼稚園や市立保育園、また、民間の保育園、幼稚園等の役割分担の中でこういったことが求められるのかというのを関係者の方とご協議をさせていただくというようなことを考えております。

西山忠男 委員

現在は確か向山幼稚園と碩台幼稚園に、ことばの教室がありますね。それだけでは多分不十分なんじゃないかと前から思っていたんですけども、現状に対する問題意識というのはどうということなんでしょうか。

松永直樹 学校改革推進  
課長

委員ご指摘のとおり、現状におきましてはことばの教室等の通所のニーズについては、地域間の偏り等もございまして、十分に応えられていないのではないかと考えております。

遠藤洋路 教育長

つきましては、例えば各区バランスが取れた通所教室の開設で  
ありますとか、そういったものも含めまして今後検討させてい  
ただきたいというふうに考えております。

よろしいですか。

他にご意見、ご質問がありましたお願いいたします。

特にありませんか。

他にないようでしたら、採決を行います。

議第31号 市立幼稚園における特別支援教育等に関する検  
討委員会委員の委嘱について、ご承認いただくことにご異議あ  
りませんかでしょうか。

（異議なしの声）

遠藤洋路 教育長

ご異議なしと認めます。

議第31号 市立幼稚園における特別支援教育等に関する検  
討委員会委員の委嘱については、原案のとおり決定いたします。

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第33号 熊本博物館協議会の委員の委嘱について

《田端 文一 熊本博物館長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第34号 熊本市指定有形民俗文化財の指定について

《北野 伊織 文化財課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

日程第4 報告

・報告（1）令和3年第1回定例市議会報告について

小屋松徹彦 委員

1点目は2ページ、学校のプールについてというところで、課題、効率等の水泳授業のあり方等を整理したうえで4年度からモデル事業開始したいと考えていると書いてございますけれども、学校のプールの今後の使い道について教育委員会としてはどのような方向で行かれようとしているのかという点が1点。それから、もう1点は次の4ページの新型コロナウイルス感染症の影響についてということで書いてございますけれども、先般、城北高校でしたかね、バレー部でクラスターが発生したということで、いわゆる部活動を通して感染が拡大していますので、あれが感染拡大した経緯というのは話されたのか、今回だと小学校、中学校、部活動を通してとか、そういったところで影響が出てきはしないか、特に変異したウイルス、子どもへの感染というのも出てきているようですので、そこら辺はどのようにお考えなのか、その2点をお願いします。

遠藤洋路 教育長

2点ありますので、まずプールから。

石加浩二 指導課長

まずプールについてですけれども、本年度、プールの検討委員会を立ち上げまして、来年度、モデル校を設定するということになります。それから順次、実施のほうにいきたいとは思っているんですけれども、ただ、プールの耐用年数ですとか学校の児童生徒数、いろんな問題がございます。可能なところで行っていくというようなかたちで考えております。

以上でございます。

遠藤洋路 教育長

では、続けてコロナ関係。

石加浩二 指導課長

部活動について、県北の高校のほうでクラスターが発生して部活動中止になったということを報道等で知っております。県外の試合のほうで起きて、そしてそれが県内でまた広まったと、寮生であったと、いろんな話が出てきております。レベル4にもなりまして、本市の部活動に関しましては、高校のほうでは県外への遠征についての試合は大会を除き自粛というかたちにしております。中学生に関しても県内のみ、元々県内のみなんですけれども、合宿等については中止にしてしております。県内における練習試合等については、十分な感染防止対策を取って、今のところ継続というかたちになっております。ただ、ご指摘

	<p>のとおり、これから先の状況がございましたので、感染が拡大するようであればどのようにするのかということで現在検討しているところでございます。</p> <p>以上です。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>まず、第1点目のプールのほうですけれども、このモデルというのは、具体的に今現在ある小学校、中学校のプールを利用して、授業のあり方等を工夫するということですか。そういった意味でのことなんですか。どういったモデルを想定されているのか。</p>
石加浩二 指導課長	<p>この中にありますけれども、民間クラブのプール、老朽化がちょっと厳しい、耐用年数が非常に今来ている学校で、近くに民間プールがあって、なおかつバスを持っていらっしゃる、それで送り迎えができる、インストラクターあたりが付いてくれるようなところを今現在探しております、2つほどモデル校としてお願いしているところなんです。まだ確定というわけではございませんので、ちょっと学校名は伏せさせていただきますけれども。あとは小中連携みたいなかたちで、1つの小学校のプールが非常に厳しい状況ですので、近くの中学校にというようなことも考えております。ただ、そこも子どもたちの安全面を配慮しなくてはなりませんので、特に十分に通えるとかいうようなところを考えて選定をしているところです。来年度、プールの授業を、民間のプールを使ってできるのではないかと。ただし、そこで出てきます課題をしっかりと捉えて次の年の実施に向けてやっていきたいというふうに考えているところです。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>であれば、新たにプールをつくるという選択肢はほとんどなくて、今あるプールを使ってどうにか適正にやっていこうという方向性ということですかね。</p>
石加浩二 指導課長	<p>資産マネジメントの観点からも、そういったところを今考えているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>モデル事業ですから、やってみてやっぱりうまくいかないということであれば、やっぱりプールをつくりましょうという可能性もあると思います。まずは試験的にということですね。</p>

小屋松徹彦 委員	<p>2点目の新型コロナの関連ですけれども、ある程度数が増えてくるということは予測されましたが、それも心配ではあるんですけれども、小中学生の感染と考えたときに部活動とかこういったものを通しての感染が増えてくる可能性があるということと、今、例えばバレー部とかでもそうですけれども、どういった感染経路で広がる、そこを抑えることが非常に大事じゃないかなというふうに思うんですね。そこもぜひ今後は、感染経路はどうだったのかということをしっかり把握していつてもらいたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の点は、何かありますか。</p>
石加浩二 指導課長	<p>今ご指摘のとおり、感染がどのようにして広がったのか、例えば部活動であれば着替えるときの密室状態になったところで起きているとか、食事をしているときとか、いろんな場面がやっぱり想定されるのではないかなと思います。こちらのほうでもその情報を仕入れながらいろいろ検討させていただきたいというふうに考えております。ありがとうございます。</p>
西山忠男 委員	<p>24ページですけれども、教育市民委員会でこれは市立高等学校の改革に関連しての質問だと思いますが、校長の外部登用についてどのように考えているのかという質問があって、多分、批判的なご意見なんだろうと思いますけれども、内部に優秀な人材がいるはずではないかと、教育委員会がそういう人たちをちゃんと育てていくような取組をすべきだというご意見のように受け止めています。これは大事な問題ですのでちょっと議論させていただきたいと思うんですけれども、校長の外部登用については、公募をすれば内部の人も応募できるんじゃないかと思うんです。そういう方向で考えているのではないのでしょうか。それはまだ議論の途中なんですか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>ご指摘の点につきましては、これからの検討課題ということではございますけれども、元々が教育分野におきまして功績のある方をというようなことでの登用を考えておりましたので、内部外部問わず、市立高校もしくはビジネス専門学校におきましては適任の方を充てさせていただきたいなというふうに考えているところでございます。ですので、実際の選定のあり方に</p>

	<p>おきましては今後ご説明もさせていただきながら、制度のほうと申しますか、内容のほうを固めさせていただきたいというふうに考えております。</p> <p>以上です。</p>
遠藤洋路 教育長	まだ決まっていないということですね。
西山忠男 委員	<p>他の自治体でも校長の公募を行って民間人材を登用したという事例はたくさんあるというふうに伺っていますが、公募すると何百人という応募があるそうですが、そういう事例を調べて民間から採用した場合、うまくいっているのかどうかですね、そういうことも十分調べたうえでやったほうがいいと思うんですよね。私の個人的な意見は、確かに民間もいいんですけども、やはり教育現場の経験がない人では難しいんじゃないかなという気持ちがありまして、実際、そういう校長を登用したところがどうなっているのかということ調べてからの方がいいんじゃないかなという気がしているんです。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	ご指摘のとおり、他都市に先例となる事例がございますので、こういったものをしっかり押さえながら、今後、あり方は検討させていただきたいというふうに考えております。
遠藤洋路 教育長	<p>他の自治体の校長経験者とかはあるかもしれないですね、外部ということで。いろんな可能性はあるんだろうとは思いますが。今の熊本市の中の人、あるいはそういう人を選ぶということもあり得るでしょうし、まだこれから、具体的にはということだと思います。</p> <p>他にはいかがでしょうか。よろしいですか。</p> <p>他になれば、これは報告ですから、本件は以上といたします。</p>
・報告（2）熊本市学力調査の結果について	
《石加 浩二 指導課長 報告》	
西山忠男 委員	2年前の全国学力基本調査で本市の課題が見えてきたと思う



んですけども、そのとき表れた特徴は、まず応用力が弱いというのが1点でした。もう1つは、成績上位層の成績が全国レベルよりも低いという、この2つがやはり本市がすべき課題ではないかなと思うんですけども、最初の応用力に関しては、今日の3ページを見ても成績がいいのは基本的な事項のところで、応用のところで成績のいいピンクに塗られているところはないように見えますので、やはりこれは経常的な課題になっているのかなという感じがいたします。

成績上位層については今日のデータでは分かりませんが、ちょっと取組は難しいとは思いますが、やはり子どもたちの個人の発達段階に応じた指導ができないと、そのこのところの課題の克服は難しいのかなと思うんですね。なかなか現場でどうしたらいいのかという名案はないんですけども、その2点について少しご意見を伺いたいと思うんですけども、いかがでしょうか。

石加浩二 指導課長

ご指摘のとおり、まずは応用力がなかなか弱いのではないかなというふうに言われておりました。今回の熊本市の学力調査の結果ですけども、応用問題、基礎問題で分析をしたんですけども、顕著に違いが出てくるということではございませんでした。1つは、問題自体が、応用問題が若干少ないというものあって、そういったものになったのかもしれませんが。基礎の問題でも弱いところがありますし、基礎の問題でもやっぱり強いところもあったと。全国と比べてですね。応用問題についてもやはり同じような結果も出てきております。

1つ言えるのは、数学、算数に関してなんですけれども、無答率、答えなかった率というのが、小学校のときには応用問題がかなり答えています。ところが中学校になると応用問題が真っ白になっちゃっているという、無答率が多くなっているというところもありますので、やはり先ほど言いましたアウトプットを大事にした授業というのをやっぱり進めていくべきなのかなというふうに考えているところです。

それともう1点、上位のところですけども、申し訳ありません、上位のところについて確認を、どのような状況かというのはしておりませんが、今回、逆に下位の部分といいますか、どういうふうにして上がっているのかというところを確認しております、ご紹介をさせていただきたいと思っております。

1ページ目にあります小学校の5年生の算数を見ていただき

ますと、令和元年と令和2年でぐっと上がっております。その前の平成30年から令和元年のところも上がって、とんとん上がっているんですけども、ここについて実は指導課のほうで学力向上支援事業というものを行っております。

これは、ベテランの退職された先生が3名出向しまして、成績の偏差値的にちょっと学力が低いところに行きまして、学校の先生と一緒に教えていく、TTみたいなかたちで入っていくという授業をやっております。平成30年のときに12校、算数で来ていただきました。そのときに伸び率だけを見ますと、その12校のうち1校だけがマイナスだったんですけども、残りは全てプラスに変わっております。こちらでは平均の伸び率が0.7ぐらい伸びているんですけども、そのところは2.8、0.28ではなく2.8平均で伸びております。

同じ子どもたちに、実は4年生のときと5年生、同一集団ですけれども、5年生のときに学校は違うんですけども、やはり同じようにさっきの先生に見ていただきました。そうすると、今度はその14校は平均で3.55上がっております。これで見ますと0.8ぐらいなんですけれども、かなり底上げといえますか、子どもたちの下の部分はかなり上に上がっているのではないかなというのが言えるのかなというところで分析をしております。

ご指摘の上位の部分について、どれぐらい上がったのかというのは、ちょっとまだ検討しておりませんでした、大変申し訳ありません。こちらの分析をまた、させていただきたいというふうに思っております。

西山忠男 委員

成績下位の生徒さんが上がってくるというのはよく分かりました。それは確かに大事なことで、やらないといけないですけども、どうしても底上げのほうに重点を置きがちだと思うんですね。それは重要なことですけども、やはり全国的な目から見たら上位層の成績向上も課題だということを認識しておいていただければなと思うんですね。

下はちょっと違いますけれども、子どもにはやはり発達段階というのがあって、個人差が大きいんですね。例えば算数にしても数学にしても、早い段階から能力を伸ばす子もいれば、かなり遅くなってから芽生える子もいるんですね。私自身が、実は高校まで数学がものすごく苦手な駄目だったんですけども、大学に入ってから数学がものすごく好きになって、数学を

遠藤洋路 教育長

使った論文を書くようになったというような経験もあって、随分個人差があるなというのを痛感しているんです。

そのお子さんの発達段階を見極めながら能力を伸ばしてやってやるという教育が大事なのではないかなと思っています。よろしく願いいたします。

他にいかがですか。

苫野一徳 委員

こちらのいわゆる全国学力テストと別の熊本市独自のテスト、調査ということでよろしいんですね。

今お話をお伺いして少し掴めたような気もするんですけども、全国学力・学習状況調査との違いは何かということと、その熊本市独自の調査をすることの目的は何かということを教えていただければと思います。

今お話をお伺いして、ちゃんと一人一人プロットして、学校間の一種の格差のようなものが見えてきた場合、しっかりとそのしんどい学校にリソースを傾斜投入して、そこを下支えしていくというお話があったので、そういった目的を持ってやられているんだなど、それであれば大変素晴らしいなと思うんですけども、他に目的とか、その目的が妥当なのかということと、その目的を達成するための方法の妥当性も少し検討してみたいなと思うんですけども。お教えいただければと思います。

石加浩二 指導課長

まず、全国学力との違いですけども、まず教科が違います。小学校の6年生と中学校の3年生で全国学力がございます。本市の学力調査は、目的のところにも記述しているんですけども、一人一人の経年を追っていきたいというところが一番大きなところではないかなと思います。ですから、小学校3年生で受けた子どもが中学校の2年生まで全部、紐付けをしていきます。ですから、個人個人の教科の伸びとかが分かるようになっております。この学力調査を受けて、その子どもさんの一人一人の苦手な部分の練習用シートとか、そういったものが出るようになっております。また、ベネッセさんとのものなんですけれども、ドリルパークというものがございます。それも単元ごとに自分で選んで自分の苦手なところ、自分の興味のあるところはできるというようなのも重ねて、これとリンクさせながらやっていくというふうに考えております。

以上でございます。

苦野一徳 委員

ありがとうございます。それはとてもいい調査だと思います。その一人一人の経年というのがかなり詳細、学び残しやつまずきがあるような単元はこういうところだなとか、そういったことはもちろん先生もしっかりと把握されるようになっているんですかね。すぐにその情報にアクセスができて、ちょっと困ったことがあればそれに対して教育センターなりの何か助けも得られたりとか、そういった総合的な支えみたいなものもあったうえなんですかね。よくいろんな自治体で起こるのは、学力が振るわない、上げろ、上げろとってお尻を叩きまくって先生が余計に苦しむというような、よくありますけれども、そうじゃなくて、むしろ困ったことがあったらちゃんと教育委員会、教育センターの支えがしっかりとあるんだという、そういう安心感の下に先生方が実践なさっているのかなと、そういうものとしてこれをしているのかどうかというのもお伺いできればと思うんですけども。

石加浩二 指導課長

ありがとうございます。

子どもたちの状況というのはデータとして各学校で見ることが可能です。分析がいろんな角度からできるようになっています。担任が自分で教科ごとに分析したり、応用活用別に分析したりとか、いろんなかたちでの分析が可能になっております。それを持ち寄って学校で学年単位ですとか学校単位での活用もできるというなかたちになっております。

教育センターのほうと協力しながら授業づくりの支援というは当然やっていくべきことだというふうに思っております。

廣瀬泰幸 教育センター  
所長

教育センターでは、こういった学力調査の結果、それとそれまでの学校訪問での見取りから、先ほどありましためあて、自ら子どもたちが問いを立てるというめあてですね、それと対話、アウトプット、協働、そして理解、次の学びへの主体的な繋ぎというところ、そういったところがやはり大事だということを踏まえまして、今年度の学校訪問、これを「授業づくり支援訪問」と銘打ちまして、学校に訪問して授業の助言、アドバイスをするところです。

松島孝司 教育次長

補足です。私が指導課長在任時に効果があったと思ったのが、学力調査結果の伸びに着目しまして、平均はいついなくても、

遠藤洋路 教育長

この1年間でベース値が伸びている学級はどういうご指導をされているか、学力調査を委託した会社と一緒にヒアリングし、そこの学力上昇の要素としてどんなものが考えられるかということを知り、それを各学校と共有するという取組でした。例えば、学級経営がどうも関係がありそうだとか、子どもたちが安心していろいろお互いに聞き合える環境があるところは共通して伸びているだとか、いろいろなものが見えてきました。

以上です。

他にいかがでしょうか。

小屋松徹彦 委員

これもコロナに関連しますけれども、休業した時期がありますよね。その後の学力試験が恐らく令和2年12月なのかと思います。前年と比べてみてもそんなに極端に学校が休校になったから落ちているというところは見当たらないようですが、唯一中学校の数学の分が少し下がっているの、そこからは何かそういった影響があったのかなかったのか、いかがでしょうか。

石加浩二 指導課長

ご指摘のとおり、中学校の1、2年生の数学が他と比べたら少し落ち込みがあるのではないかなというふうに思われます。実はこれは、本市は12月に試験をしております。この試験は自治体によっては1月、2月に試験をするというところもございます。同じ試験なんですけれども、本市が行った試験の後に速報値というものが出ます。その後、全ての学校が終わった後に確定値というものが出るようになっております。全ての学校の平均を出したもののなんですけれども、実はこのときに偏差値が1ほど確定値になったとたんに上がったといいますか、全体が上がったのでうちが下がったという状況になったんですけれども。それについて、どうしてそのような差が出たのかということ、どうして会社の方に問い合わせたところ、実は本市と同じぐらいの規模の自治体で4月前半に数学をやっていた自治体もございまして、そこはかなり数学に特化してやっていたらいいんですけど、他の教科はせずに数学だけを取り組まれていたらしいんですけど、そこがこの年、1月に時期をずらされたということで、そこが影響しているのではないかとことを言っていたところでした。それで1つは影響があるのかなというふうにも考えているところです。

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>以上でございます。</p> <p>つまり、同じ試験を受けているほかの自治体で数学の成績が非常にいいところが入っていたから相対的に熊本市が下がっているという、そういうことですか。</p>
<p>石加浩二 指導課長</p>	<p>それが1つの要因になっているかもしれないというところで、もちろん今から先、子どもたちの力を強くつけていくところが大事だということは認識しておりますので、支援を続けながら学力向上に向けた取組を続けていきたいというふうに思っております。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>今のお話がそれに当てはまるか分からないんですけども、調査が先生方にどのようなものとして受け止められているかご存じの範囲でお聞かせいただければと思うんですよね。特に全国学テのようなもの、よく聞かれる話ですけども、とにかくテスト対策させて学力上げろ、学力上げろとお尻叩かれまくることで、対策、対策させまくる、そうすれば短期的には上がりますけれども、子どもたちは長い目で見たら学びから逃走を起こしてしまうというような事例も無数にあるわけですけども。熊本市でどのようにこの調査目的とかを共有し、これはあくまでも子どもたち、そして先生方を支援するツールなんだと、あくまでもそういうツールだから、このテストの結果を上げることが目的化してはいけないんだと、そういったコンセンサスがどれぐらい。そのようなものだと思うんですけども、そのようなものとしてここではコンセンサスがあるんじゃないかと私は勝手に思っていますけれども。それはどれぐらい先生方に共有されているか、あるいはもしそういったものになっていなかったらコンセンサスを取っていく必要があると思うんですが、私は感触がよくまだ掴めないものですから、教えていただければありがたいなど。</p>
<p>石加浩二 指導課長</p>	<p>ご指摘のとおり、学校現場がどういうふうに捉えているのかというのはとても大切なところだと思います。この調査が終わった後に、校長園長会をしまして、この結果についてお話をさせていただいているところです。そこで一番大切なものとしてお答えをしているのが、これを使ったPDCAサイクルをつくりましょうということを訴えております。これが良かったから、</p>

	<p>悪かったからではなくて、子どもたちにこの力をつけましょ ねということで、これを1つのきっかけにして、先ほど言いま したけれども、苦手なところのシートができるとかいうところ で12月に行いますので、その後の3か月間、その間で子ども たちの苦手なところを克服して、次の学年に子どもたちが安心 して行って、また学びに向かえるようにしたいなというところ でこのことは捉えていただいているというふうに思っております。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>菅野委員がおっしゃっているのは、これは学校でどのぐらい この点数を上げることへのプレッシャーになっているかという か、そういうことですよ。例えば昨年度まで学校にいて今年 度教育委員会に来た人に聞いてみると実際どうなのか分かる と思うんですけども、教育センターの両副所長、どうですか。</p>
<p>小田浩之 教育センター 副所長</p>	<p>昨年度まで小学校で校長をしておりました。テストはもちろ んですけれども、昨年度はコロナ対策のほうですごく毎日毎日 が大変だったなというところがありまして、このテストに関し ても範囲をきちんと履修できるかどうかというところも不安が ありました。ただ、先ほどありました小学校5年生の学力向上 支援のほうですけれども、実は本校には来ていただいでいて、 とても効果があり、5年生の子どもたちにとっては自信につな がる結果が出ました。そういったところで今回教育委員会から 学力向上支援を派遣していただいたことでとても助かったなと いう面がありました。この結果を受けるといふ部分、確かに前 年度非常に厳しい部分があったので学力支援が来たという部分 もありましたけれども、その結果を受けてきちんと対応してい ただいたということで、学校側としてはとても助かったなとい う経験があります。</p> <p>以上です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>何かテストの成績を上げなきゃ教育委員会に怒られるみたい なプレッシャーとかはあったんですか。</p>
<p>小田浩之 教育センター 副所長</p>	<p>いや、それは特には、私個人はありませんでしたし、職員に も特定の学年や教科などで個別に点数を上げるように言ったこ とはありませんでしたので、そういったプレッシャーを感じた ということは特にございませでした。</p>

遠藤洋路 教育長

分かりました。

福田衣都子 教育センター  
一副所長

私も3月まで学校現場におりまして、4月からこちらのほうに参っておりますが、先ほどおっしゃったように、成果を上げることを目的としてはいけないというのは、校長として常に思っていたところです。大事にしたいのは、いかにその子、その子がどのように伸びて、それをしっかり分析して活かすかということでしたので、職員とも調査結果が出たときには、しっかりそれぞれに分析をして、3月までにまずはできることをやろうと、そしてその結果を基にまた4月からきちんと引き継いでいこうということは話をしておりました。ですので、それを目的として私も思っておりませんでしたので、自分自身がそういう呼びかけをしたことで職員もそのように捉えてくれたのではないかなと思います。事前に学力テストがあるから大変だとか、そういう声は、聞こえてはきませんでしたので、今後もそういう状況でありたいと思っております。

遠藤洋路 教育長

教育センターに来るぐらいですから、模範的な回答なんですけれども。でも、率直に言って学力を落としていっているからテストの点を上げなきゃということを聞いたことは1回もないので、あまり気にしていないんじゃないでしょうか。気にしていないと言ったら失礼だけど、そこをプレッシャーに感じてはいないように思いますね。教育委員会としても何か特に点を上げろということも言っていないし。県の教育委員会は全国学力の平均点にするんだみたいな目標を立てたようなんですけれども、特に市ではしていないし。むしろですね。そういう感じですから、あまり追い立てられるように試験の成績を上げなきゃという、そういうことはないんじゃないかなという感覚ですけれども。どうですか。

松島孝司 教育次長

今、教育長からありましたように、私も指導課等、学力関係担当部署におりましたけれども、学校がどう捉えているかは別として、点数を上げてくださいという話をしたことはないと思っております。それよりも、授業を改善してくださいということはずっと申し続けておりました。学力というのは授業が良くなってそこに伴ってくる、あるいは学校の環境が良くなって伴ってくるものであって、先ほど苫野委員もおっしゃったように、



苦野一徳 委員

点数だけの問題じゃないと思います。学力テストでは、必ずP D C Aサイクルを回し、弱点を克服して次年度に繋げてくださということ、何度も何度もしつこくお願いしてきたところ、ただ、担当課としては全国学調の数字が出るとプレッシャーは感じておりましたが、かといって学校にそれを具体的にどうしてくださということはありませんでした。授業を変えましょうということはい続けてきたところ、

ありがとうございます。とても安心したと同時にすばらしいなと思いました。P D C Aを回すのも大事なんですけれども、その前に、松島次長がおっしゃったような、子どもたちが安心して楽しく学べるのが大事だというメッセージが、そこに常に流れているというのがあれば大丈夫かなと、それはとても素晴らしいことだなと思いました。

すみません、ついでながらもう1つなんですが、学校間とい、いますか地域間の格差というものはどれぐらいあるんでしょうか。その把握をどのようにされていて、どのように対策を考えていらっしゃるのか、教えていただければと思うんですが。

石加浩二 指導課長

地域差とか学校間格差とかは、申し訳ありません、調べておりません。それよりも子どもたち一人一人というかたちでしておりますので、申し訳ありませんけれども、もちろん調べようと思えば調べられるのはもちろん調べられるんですけれども、今、分析の中でそういったことは行っておりません。

苦野一徳 委員

もちろん、特に絶対に必要だとは思わないので、一人一人にちゃんとされていて、そこに手厚く支援があれば、問題ないとは思うんですけれども。ちょっとその辺、特にそれもどこか地域の名前を挙げて議論をすることもできませんけれども、ある程度そういったものを把握していれば、支援のより傾斜配分もできるのかなと思ったものですから、それは一人一人にということであれば、それはそれで良いのかなと思いました。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

今までの学期のテストの結果とかで学校ごとの結果を見ることもあるんですけれども、規模の小さい学校が極端に高かったり低かったりするものが結構多くて、毎年そのときによってかなり変わるという、そういう印象があります。ずっと低いところ

	<p>とかずっと高いところというのはあまりない。傾向としてはあるかもしれませんが、かなり上位のところは小規模だったり、かなり下位が小規模だったりということはあります。一人一人の出来によって相当左右されている、そんな印象があります。</p>
西山忠男 委員	<p>今のお話ですけれども、先ほど副センター長のお話にあった学力向上支援員の派遣はやはりこの調査結果を見て低いところに派遣しているんじゃないんですか。</p>
石加浩二 指導課長	<p>そのとおりでございます。算数に特化しておりますので、算数のそのときの成績で派遣をさせていただいています。委嘱3名なので派遣に限界がございますので、十何校、年によってちょっと変わりますけれども、そういったかたちでの派遣になっております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>つまり、算数は学校別に結果は分かるんじゃないですかということですね。分からなかったら派遣できないですね。</p>
石加浩二 指導課長	<p>学校は学校別で出すことができます、もちろん。地区別というのはしたことがないということです。すみません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>私からもちょっと1つ。これは算数、数学を除くとそんなに顕著な変化はないんですよ、毎年。先ほどの算数の小学5年生とか数学の中学2年生とか極端に変わっていますけれども、それ以外はそんなに毎年変わっていないなという印象で、そう考えるとさっきの母集団の影響というのは結構あるんじゃないのかなと思います。逆に、小学校5年生も支援員の効果だけなのか、母集団が変わっている可能性もあるのかもしれないので、丸々これをそのまま信じるのもどうかなという気がしますが、それ以外はあまり大きな変動がない、そういうふうに見ていいのかなというふうに思いました。</p> <p>それともう一点、すみません。4ページの今後の取組で、授業改善という、それに関して一点目の丸はよく分かるんですけども、二点目の生徒指導の三機能による学級づくり、自己決定、自己存在感、共感的な人間関係という、これは授業改善に直接にはどのように繋がっているのかということをお教えいただけますか。</p>

石加浩二 指導課長

例えばなんですけれども、自己決定といいますと自分で主体的に学べるように教師側が個に応じた支援を行うとか、学習の振り返りをする、本人が自分でしっかり考えられるような場を設定してあげるとか、教師がずっと喋ったり話したりまとめたりするのではない、子どもが自分で考えて自分でこうなんだと決定していくような場面もやはり教師が設定するというかたちになっております。

二番の自己存在感のところになりますと、例えば授業の中でよくできているねとか、そういった言葉がけ、承認や賞賛の言葉がけ等を行うことによって子どもが自分の有用感といいますか、そういったものをきちっと持てるような授業形態にしていくべきだろうなというふうに思っております。

また、例えば子どもがちょっとつぶやいたことをさっと取り上げてあげるとかいったところが子どもの存在感を上げていくことになるのではないかなど。それが授業に前向きに向かって行くような子どもたちを育てるのではないかなと思います。

共感的な人間関係ですけれども、例えば、誰かが間違っただけを言っても、それをちゃんと受け入れてくれるような集団であれば、子どもが自分の意見をしっかり発表することができる、その発表によってまた周りの子どもたちも学んでいく、そういう集団をつくることで学校の授業がどんどん変わって行って、学力も上がっていく、そういった授業というのをしてほしいなということで、こういうことを挙げております。

以上です。

遠藤洋路 教育長

私たちが目指している授業の方向性というのは、正にそういうことだと思うんですけれども。その成果というのは、この学力調査に表れるんですかね、結果として。

石加浩二 指導課長

授業が変わって、子どもたちが学びに向かう力がついて、子どもたちが自分で主体的に学んでいけば、学力はついていくというふうに信じております。学力がつけば試験の結果にも反映するのではないかと。ただ、そのときの問題ですとかいろんな状況によっては変わるかもしれませんけれども、子どもたちに自立をさせたいなというふうに思っているところです。

遠藤洋路 教育長

今言っているような、例えば主体性とかそういうものというのは、必ずしも各教科の結果に表れるとは限らない、非認知的な部分もありますよね。これだけ見るわけじゃなくて、今言っているような子どもが主役の学びの授業になっているんだろうとか、その結果として子どもが主体的に学ぶ、そういう力がついているかどうかというのは、この試験の結果だけではない何か検証の方法というか、そういうものがあるといいなというふうに思いますので、それは研究してみてください。

石加浩二 指導課長

本市では、子どもたちのそういった意識あたりのために昨年度から意識調査を新たに入れております。それを各学校で子どもたちがどういう意識で学びに向かっているのかということも考えながらやっていくというところでございます。

特に授業改善と書いてありますけれども、この2つ目の生徒指導の三機能による学級づくりでは、一番大きな土台になるものだというふうに考えております。教育長のご指摘のとおり、各教科でめあてや対話、振り返り、そういったことをしっかりやるのが教科の学習には必要不可欠であるということを確認しております。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

今そんな指摘しましたか、私。まあいいです。

森江一史 教育次長兼  
学校教育部長

昨年度まで教育センターにおりまして、この授業改善につきましてもここに敢えて生徒指導の三機能による学級づくりという項目を挙げさせていただきましたのは、今、指導課長も申しましたとおりですが、もう1つ、この授業づくりの前提として学級づくりがあるという考え方も当然ありますけれども、授業を通して学級をつくっていくということも大事にしたいということもあります。各教科の授業を通して学級づくりをしていく、その結果として学力検査に見えない部分につきましても本年度から、昨年度はコロナの影響で学校訪問しておりませんが、学校訪問を通して今回から各課の学校訪問、また、教育センターでは先ほど所長が言いましたように、授業づくり支援訪問ということで授業を見せていただきますが、当然、その授業を通して学級づくりの様子についても各担任と教育センターと情報共有し、また各課にもその状況を共有していきたいというふうに考えています。

以上です。

苦野一徳 委員

こちらのめあて、対話、振り返りなんですけれども、これは学習科学でもかなりエビデンスのある非常に優れた観点だということは、自分なりに解釈しているんですけれども、同時にこれがこういったかたちでめあてを出して、こういったかたちで対話をして、こういったかたちで振り返りをしなさいよというような型というのは決めないほうがいいと思いますので、その辺を私のゼミの卒業生が今、緩やかな協働に支えられて自由進度学習なんかもやっているんですよね。そうするとめあてが一人一人違うんですよね。聞いたところによると、相当成績が上がったと。特に下位層に相当のいい影響があったというようなことも、結構メインで来たようなんですけれども。毎回必ずめあてを全員で共有しなさいとか、こういうかたちで出しなさいとかいうのをあまり決め過ぎないというのがとても大事だと思うので。その辺の先生方の裁量とか主体性とか、そこをそれぞれの状況に応じてサポートしていくというような、そういったところ、多分そうなっていると思うんですけれども。ここも、例えば下手をすると学校によって全部揃えなさいねということになりかねないので。こういうことが課題ですので、そこは意識して共有していきたいなと思っております。もし何かその辺であればお聞きしたいと思います。

廣瀬泰幸 教育センター  
所長

苦野委員にご指摘いただきました、そのとおり考えております。これは、こういった型で授業をしなさいというものは全くありません。自ら問いを立てる、見つけるんです。そういっためあての質、子どもが問いを立てるとい、そういう質のところこだわっているものです。この順番に行わなければいけないというものではありませんし、授業によって中には振り返りが無い授業もあるかと思えます。1時間、1時間の授業で学びが完結するのではなく、単元を通して、もっと言うと、1年間を通してというような長いスパンでその後、子どもがこういう姿になってほしいという思いを持って授業は構築していくものだというふうに考えておまして、そういった授業観、そういったところを改善するために学校訪問を行いまして、一人一人の授業を指導主事が1時間丸々しっかり見させていただいて、助言をすることを考えているところです。学校訪問の前に指導主事が学校にお邪魔しまして、こういったところを大切に授業づくりをしていきたいと思いますという話もしていきたいと考

西山忠男 委員

えております。

私は以前から気になっていることがあるんですけども、それは私の家の近くに学習塾が何軒かあるんですけども、いつも夜遅くまで子どもたちがいるんですね。何割ぐらいの生徒さんが学習塾に通っているのか分かりませんが、かなり繁盛していますよね。そういう状況を見ると、学校の教育が信じられていないような気がするわけです。学習塾に行かなくても十分学力がつかますよという安心感を保護者に与えられるようなやっぱり教育を提供すべきだと思うんですけども。

塾に行く生徒はなぜ塾に行くのか、多分、動機は大きく2つに分かれると思うんですけども、なかなか学校の授業についていけないから塾で補完するという考えの人と、それから成績上位の人で進学校に進学したい、学校の授業ではとてもその力がつかないから塾に通うという、この多分2パターンあるんだと思うんですけども、それが先ほど私が申し上げていた成績上位層の成績向上という点と、それから子どもの発達段階に応じた、あるいは子どもの特性に応じた教育ということなんですけれども、そういう両方のニーズを満たせるような教育、非常に難しいと思うんですよ。授業をしているときはどうしてもやっぱり平均レベルに合わせた授業をせざるを得ないので、成績下位のお子さんが取り残されたり、成績上位のお子さんが退屈したりということはどうしても起こります。これは私も教師ですからよく分かるんですけども、そのところを克服しないと今の現状は変えられないんじゃないかなと。

繰り返しますけれども、保護者に信頼される教育、塾にやらなくてもいいと思わせるような学校教育を目指していただきたいと思います。

遠藤洋路 教育長

苫野委員はその辺、詳しいんじゃないですか。

苫野一徳 委員

なかなか熊本だけの問題じゃないですよ。日本全国でこ不安を抱えた保護者たちの、その不安を支えるような機能をしている学習塾なり、企業さんにもありますので、一概にそれを否定することもできないと思うんですけども。学びでいうと今、いわゆる落ちこぼれ問題の話もなさいましたけれども、多分、熊本市はこの授業改善を通してそのあたりをかなり克服されようとしているんじゃないかなという印象を持っています。

これも学習科学なんかでよく分かっていることですが、みんなと同じことを同じペースでやると必ず落ちこぼれが生まれて学習時間の大体半分以下ぐらいしか実は頭を働かせていないと、そういうエビデンスもありますけれども。ではどうすればいいかという、もうはっきりしていて、子どもに合ったレベルで子どもに合ったペースで学ぶことができ、しかもそれをちゃんと伴走者がいて、しかも仲間に困ったときに助けてもらえて、自分も困っている人がいたら助けにいけるという、こういう安心できる学びの環境の中で学んでいけば、学力は確実に保障される、一斉でやるよりは圧倒的に効果があるということはよく分かっているので、熊本市はまさにそれを目指した授業改善を、タブレットを活用しながら、私の娘もみんな結構ドリルパークなんかは一人一人全然違うところをやっているよとか、当たり前のようにタブレットを使いこなして、自分の課題をやっているんですよ。これを続けていけばかなり学力保障できるんじゃないかなという気がいたしました。

すみません、学力保障という言葉を使ったのでついでなんですけれども。これは好みなんですけれども、学力向上支援員というのでもいいかなと思うんですけれども、義務教育の場合は向上、向上というと何かちょっと息苦しいというか、学力保障みたいな、義務教育はやっぱり全ての子どもに学びを必ず保障するというような、そういうことは大変大事な至上命題だと思うので、好みなので別にどうでもいいんですけれども、学力保障という言葉は大事だなという気はしております。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。では名前もちょっと考えましょう。

出川聖尚子 委員

保護者として感じているのは、学校で学んでいることは十分じゃないとは思っていないんですけれども、自分の子どもの学びに、さっき菅野委員が伴走者がいるとおっしゃったように、これでいいのかなというときの支援が、欲しいなと思っています。だから、学校で学んでいる内容が簡単とか難しいとか、そういうことではなくて、自分の子どもの学力や状況に対して親受験とかがあって分からないので、伴走という言葉になるのかもしれませんが、丁寧に支援していただけるような状況が欲しいなということを思っています。

遠藤洋路 教育長

これ以外にもサポートして、教える人が欲しいということ。

出川聖尚子 委員

そう思っています。

遠藤洋路 教育長

そうですね、必ずしも学校が不満だからというのでもない。  
他にはいかがですか。よろしいですか。  
では、他になれば本件は以上といたします。

・報告（4）令和3年度（2021年度）熊本博物館年間スケジュールについて

《田端 文一 熊本博物館長 報告》

西山忠男 委員

通年講座は毎年どれぐらいの参加者があるのでしょうか。定員40名ぐらいになっていますけれども、実績としてはどれぐらいあるのでしょうか。

田端文一 博物館長

この通年講座につきましては、今現在はコロナの関係がありまして、定員を概ね20名から25名程度に絞って開催をさせていただいております。年間の開催の回数も講座によって若干違いますけれども、多いところは毎月、少ないところは隔月でというかたちで開催をしております。いずれにいたしましても平日の開催ということで、今のところ、子どもたちが参加できるような内容にはなっていないんですけれども、今後は子どもたち向けの土日に開催する通年講座もできればいいなというふうには考えているところでございます。

遠藤洋路 教育長

他にはいかがでしょうか。特にありませんか。  
特になれば本件は以上といたします。本日の公開案件の審議がここまでですが、何かこの際、質問しておきたいことがあれば。

苫野一徳 委員

リスクレベル4になったということで、各学校は一斉ということにはなかったにしても、いろいろと閉鎖ということになるということを想定しないといけないと思いますけれども、この会議でもしばしばお聞きしていたので安心はしているんですけれども、そういったことが起こったとき、万全な準備がなされているのかどうか、少し現状をお聞かせいただけるとありがたい



松島孝司 教育次長

など。

レベル4になった時点で学校には学習指導、あるいは部活動の運営等の通知を発出したところです。今後の見通しとしましては、明日には、実際レベルが上がったときは、具体的にどういったことが想定されて、どう対応していくのかシミュレーションしながら検討する予定です。

基本的な考え方としては、全てを止めるという方向ではないだろうと考えています。中でも、給食はなかなか止められないし、どうにか確保しなければいけないだろうけど、感染リスクが高く、密で危ないのは給食の時間なので、今後どうするかを考えていく必要があると思っております。

分散をすべきなのかとかも含めたところで、幅広くしっかり検討し、いざというときに慌てなくて済むように準備をしているところです。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。他には特にないですか。

この後、議第32号、議第35号、報告（3）は非公開で審議を行います。

[非公開の審議]

- ・議第32号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱及び任命について

《若杉 敏郎 特別支援教育室長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第35号 熊本市附属機関設置条例の一部を改正する条例案に対する意見について

《田口清行 青少年教育課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・報告（3）熊本市立学校教員採用選考試験の実施について

《濱洲義昭 教職員課長 報告》

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の日程は全て終了したので、令和3年4月の定例教育委員会会議を閉会いたします。